

見習いの式

ナツシユは、人差し指の切り傷を舐めた。凧を作っている時に、木のささくれでやってしまったのだ。

「ナツシユ、見て見て！」

ぽつてりとした腕で布を抱えてきたのは、今年八つになるかぼちゃだった。

「どれが、どれがいいかな」

かぼちゃは、さまざまな布をばらまいた。麻布、綿、掛布団、誰かのルダラ、たくさんある。

彼らは、がらくたが山のようにできたクウエクト石の庭にいた。保育部屋からは、次々とがらくたが出てくる。玩具、服、本、靴、紙切れ、布切れ、家具、まるで、大掃除みたいだ。

それもそのはず、今日は、見習いの式の日だった。満十二歳になった子たちは、朝から風呂に入れさせられ、髪を整えられ、爪を切られ、見習い服という、真っ白で上等な服を着せられた。

ナツシユも例にもれず、ちゃんと採寸された見習い服を着ていた。その白さは、色とりどりのクウエクト石の庭で映えた。

だが、ナツシユは、新品の白さを保つ気はさらさらなかった。なんなら、汚す

気満々だった。なぜなら、ここを離れる準備がまだできていなかったからだ。

「もっと薄い布の方がいいよ。それか、紙とか！」

ナツシユは、かぼちゃに言った。彼とも今日で遊ぶのが最後になってしまうなんて、信じられなかった。かぼちゃには同い年の友達がいるからいいかもしれないが、ナツシユにとって、彼は唯一の友人なのだ。

かぼちゃは、「紙ー！」と叫んで、また探しに出かけた。ナツシユは、凧作りにいそしんだ。凧作りは、ピクランタが教えてくれたものだ。これをやると、気持ち落ち着く。

やり方を思い出していると、手元に翳が落ちた。

「なーんで、お前が見習い服を着ているんだ？」

蜘蛛だった。ナツシユは、思わず凧を引き寄せた。「それはこっちの台詞だけ」と言いたかったが、黙っていた。

輝かしい見習い服を着ている蜘蛛は、その白さが残酷なほど力強く見えた。

長い手足を不気味に揺らしながら、彼は言った。

「なあ、ナツシユ、見習い服を着ても、お前の正体は誤魔化せねえぜ。お前、このがらくたの仲間だろ」

蜘蛛は、さっとまわりに腕を振った。彼の背後に集まっていた仲間が、ゲラゲラ笑った。

ナツシユは、逃げるようにがらくた山を回った。

だが、蜘蛛たちは影のようにくつついてきた。

「その見習い服、誰かの落とし物だろ。早く返して来いよ！」

誰かが言った。それにみんなは歓声をあげ、蜘蛛はそいつに、「いまのは五点！」と点数を付けた。

「違うよ。ナツシユは、もう見習いなんだよ」

その声に、ナツシユは、ぞつとした。かぼちゃだ。何、余計なことを。ナツシユは目をつむった。

「へえ、そうかい、まるっこかぼちゃくん。こんな呪いまみれのやつでも見習いになれるなんて、みんな知ってたかく？」

「いいや、あいつは魔導師の木行きだ！ 心臓を食ってもらった方がいい！」誰かが言った。また賛同の声が上がる。

「おい、呪い野郎、お前は、お友達のものでぶかぼちゃと保育部屋を出ろ。お前なんかと見習いの式に出たくねえんだよ。さっさとこいつとどっかに消えな！」

蜘蛛は、かぼちゃの腹をどついた。かぼちゃは、ころんと後ろに転がった。

ナツシユは、そこで、ぎらっと振り返った。

(この蜘蛛野郎！ 虫野郎！ お前なんか、鴉に食べられちまえ！)

言ったつもりだったが、どうやら声になっていなかった。だが蜘蛛は、ナツシ

ユの睥睨を見ると、とたんに飛びかかって来た。けれど、足元にいたかぼちゃに躓いた。ナツシユは走り、落ちていた枝を掴んだ。「やれ、やれ、追いかける！」子どもたちが蜘蛛をそそのかす。

蜘蛛は、ナツシユの肩につかみかかった。ナツシユは枝を振り回したが、蜘蛛の勢いに押され、後ろへ倒れた。蜘蛛の拳が振り上げられる。

「その呪い顔、もっとましにしてやる！」

とたん、一人の守りの人が現われた。かぼちゃが呼んだのだ。

「また喧嘩なの？」と守りの人。

「ナツシユが、枝で蜘蛛をぶっ刺そうとしたんだよ！」

蜘蛛側の子が言った。するとみんなで、「ナツシユが悪い」と言いはじめた。

ナツシユは、黙っていた。石のように、むつつりと。はやく嵐が過ぎ去れと思った。

蜘蛛は、こつそりナツシユに唾を吐いて、姿を消した。守りの人がなにか言ったが、ナツシユは答えなかった。じつとうずくまって耐えた。

気づけば、庭には誰もいなくなった。唯一残ったのは、かぼちゃだった。

「紙、もってきたよ」

ナツシユは、頷いた。地面を蟻が一匹通る。

引っ搔かれるような虚しい痛みが治まるまで、彼は動かなかった。

凧は、午後になって完成した。二人は、何度も空へ凧を飛ばし、ルドラがくすむまで遊んだ。

かぼちゃのいいところは、みんなのナツシユの扱いについて、なにも言わないことだった。これ以上いい友達が他にいるだろうか。蜘蛛が言ったように、もしかぼちゃが同じ年だったら、もう少し違っていたんじゃないかと思った。

「ねえ、これ、読んで」

がらくた山の麓で休息しながら、かぼちゃが本を持ってきた。

その題名を見たナツシユは、懐かしく思ったのと同時に顔をしかめた。『大魔導師アケラス 七色鳥を追って』だったからだ。

「それ、好きじゃない」

「なんで？」

「……わかるでしょ？ アバルバン谷を思い出すからだよ」

かぼちゃは、じっと本の表紙を見つめた。

「アバルバンの話、僕、おかしいと思わないよ。ナツシユのこと、おかしいと思わないよ」

かぼちゃは必死に言った。

「アバルバンなんかないよ。アバルバン」

言いながらナツシユは、かぼちゃから本を受け取った。中を少し読む。昔は、わくわくする冒険物語だとおもっていたけれど、いまはそう感じなかった。

「君がおかしくないと思っても、みんなはこの話を聞くと、『お前がおかしい』『呪われてる』って言うんだ。僕は、もう二度と話さないよ。これからは、普通の子になるんだ。それで、普通に会話して、遊んで、一緒にお昼ご飯とかを食べる、新しい友達をつくる」

「僕もいるけど」

かぼちゃの答えに、ナツシユは窮した。

「そうだね。君はじゅうぶんすぎるほどだよ」

ナツシユは、本をかぼちゃに返した。

そのとき、ピクランタの声がした。

「ナツシユ、なにやってる！ お別れの会にも出ないで。服についてるそれは、絵の具か？」

「凧を作ったんだよ、ピクランタ！」

裾についた絵の具をこすりながら、ナツシユは凧を掲げた。

「もう式に行く時間だぞ。ああ、せっかく新しい服なのに」

すると、かぼちゃがどこかへ駆けだした。彼の〈育ての者〉のガルドもやって

来たからだ。

「よお、いい感じに汚れてるじゃねえか」

「なに言ってる、ガルド。女王様もご出席なさる式なんだぞ。これじゃつまみ出される」

「エサルノア女王様は、そんなことしねえよ。たぶん、にやにや笑ってくださるさ」

ガルドはそう言って、ナツシュの肩を叩いた。

「見習いおめでどう、ナツシュ。またいつでも遊びに来い」

その、重く、暖かい衝撃は、ナツシュに現実を教えた。本当に、本当に終わってしまう。保育部屋の生活が、もう終わるんだ。

「……うん、ありがとう」ナツシュは、ちょっと微笑んだ。

「おめでとおお！」かぼちゃも言った。

ナツシュは、凧を彼に渡した。

「あげるよ。大事にとっておいて」

かぼちゃは歓声を上げ、ガルドのまわりを飛び跳ねた。

ピクランタに背を押され、ナツシュは、クウエケト石の庭を後にした。

もう二度と入ることのない庭。もしかしたら、ピクランタみたいに守りの人になって、戻ってくることもあるのかもしれない庭。だが、本当のところどうなるの

か、誰にもわからない。

ピクランタが背中を叩いてきた。

「そんな顔すんな、ナツシュ。お前なら、最高の見習いになれる。だから、思いっきり見習いの式を楽しんでこい」

彼の顔を見た瞬間、ナツシュの中で、何かがすーと落ちていく感じがした。いままで気にしていなかったピクランタの顔のありとあらゆる部分が、目に飛びこんでくる。何かをこらえている眉毛、穏やかな瞳、ぐしゃぐしゃな髪の毛、薄い唇。そして、くすんだ肌と、ところどころに現れた小皺……。すべてが、急に忘れてはいけけないもののような気がして、ナツシュは、彼の顔から目が離せなかった。

ピクランタは、ナツシュの沈黙に笑った。

「来い、ナツシュ」

彼は腕を回して、ナツシュを抱きしめた。

「まあ聞けよ。周りからどう言われようと、どう思われようと、気にすることはない。お前は最高のアベドだ。これから、名前が変わるとしてもな」

ナツシュは、静かに頷いた。しかし、この先のことを思うと、暗い嵐の中にあるようだった。

ピクランタは、そんな彼の背を、二度ほど叩いた。

「なあ、俺はお前の味方だぜ。うまくいかなかったら、凧を作ってみろ。案外、尊敬されるもんだぜ？」

「うん」

ナツシユは、ピ克蘭タの背に触れた。あまり偉大な背ではなかった。それが、とても哀しかった。

「また会いに来るよ」

「……ああ、わかってる。いつでも待ってるぞ」

彼らは、体を放した。

ピ克蘭タは、十二年間のすべてが、砂のように手からこぼれていくのを感じた。あの骨入り液体だと思っていた子が、今や自分の足で立ち、自分の問題に直面している。あれほど無垢に息をしていたのに。

そんな彼に、ピ克蘭タは何か言ってみようと思ったが、喉が詰まった。だから、鼻をこすって大声で言った。

「さあ、ぐずぐずしてられない。会場は抱えの木だ。急ぐぞ！」

「おい、ちびすけ達！ 今日とはとんでもなく大事な日だ。みんな、帯革をしっかりしめたか？ 服の皺も、ちゃんとのばして！」

抱えの木は、太った巨木だった。大きく腕を広げるようにして、歓迎するような形をしているその木のうしろから、ナツシュたちは入った。けれど、その暗い通路には、子どもと守りの人がわんさかつまっていた。

「すごい騒ぎだな。そういえば、ナツシュの生まれた年は、めっちゃめっちゃ子ども数が多かったんだよな」

ピクランタは目を丸くして言った。

「そうなの？」

「ああ。他の仕事と兼任する者もいたんだ」ピクランタは言った。

「おい、のっ原、鼻くそほじるな！」

禿げた守りの人が前方で怒鳴っている。そこで、後ろから声がした。

「あら、ピクランタ!？」

振り返ると、ピクランタと同じ年くらいの女アベドがいた。こげ茶の髪を後ろで束ね、人懐っこそうな笑みを浮かべている。生え際からこぼれている髪が、何事も気にしない、おおらかさが感じられた。……しかし、ナツシュの知らない顔だった。

だが、ピクランタは、「フロリラ!!」と叫び、お互いに拳をつくると、仲良くぶつけ合った。

「守りの人任命式以来じゃないか!? 〈育ての者〉になっていたのか？」

「五年前からね。この子の〈育ての者〉になったの」

そう言ってフロリラは、傍にいる少年の肩を叩いた。

「なんだよ！」

友達と喋っていた少年は、フロリラを睨んだ。

「はいはい、邪魔したわね。……この子は、ヒルガオ」

ヒルガオと呼ばれた少年は、金髪で、薄暗い洞の中ですごく目立っていた。さらさらと、彼が動いたときに、耳の上や眉の上で踊る。彼は、その丸顔をちよつとナツシュに向けると、また友達とのお喋りに戻った。

「こいつはナツシュトールだ。ナツシュって呼んでる。……ナツシュ、こちらは僕の同級生、フロリラだ。同じ守りの人になったんだ」

「……どうも」

「へえ、賢そうな顔してるね」

ナツシュは、どう反応して良いかわからず、はにかんで少し肩をすくめた。

「フロリラが〈育ての者〉になっていたなんて。まったく顔を合せなかったな」とピクランタ。

「そうね。どこの保育部屋使ってたの？ 東の？ 西の？」

「いいや、北だよ」

「まあ、反対側じゃない！ 会わないわけね」

二人はそこで昔話に花を咲かせた。

ナツシュは、横目でヒルガオを見た。フロリラは、五年前から彼の〈育ての者〉になったと言っていたが、その前は誰だったんだろうと、ナツシュは思った。すると、高らかな笛の音が響き渡った。ナツシュは、自然と背筋を伸ばした。

「いよいよね」

「懐かしいなあ」

フロリラとピクランタが呟いた。

「おー！ 頭がドキドキしてきたっ！」ヒルガオが叫んだ。

「頭じゃなくて、胸じゃないの？」前にいた女の子が指摘する。

「どっちも同じだろ」

ヒルガオは、つま先立ちをした。ナツシュも、背伸びをして先の様子を伺った。

「何が見える？」

ナツシュは、振り返った。ヒルガオが、こちらを向いて訊ねていた。

「えっと、何も。黄色い光がある。あと、頭だらけだ」ナツシュは、上ずりながら答えた。

「なあ、もし向こうから、頭の高さで、特大の紙やすりがきたら、みんなてっぺん禿げになるぜ」

「迫ってくる前に、屈めばいいよ」ナツシュは笑って言った。

「そうさ。俺たちは最後だから屈んでよけられるけど、他のみんなは、よけられない……。みんな禿げさ」

ヒルガオは、頭の上をしゅつと撫で、屈んでみせた。二人はゲラゲラ笑った。「みんな禿げ！」

「ほらほら、列が進んでいるわよ、ヒルガオ」

フロリラが、彼の背中を押した。「あんまり遅いと、女王様にナメクジにされるわよ」

「ひいひい、俺はもうヒルガオじゃねえよ。ちゃんとした名前貰うんだ！」

「はいはい。さあ、行ってらっしゃい」

彼らは、拳を作って、ぶつけあった。それから、ヒルガオは駆け出した。

ナツシユは、今一度ピクランタを振り返った。ピクランタは、ぎゅつとナツシユを抱きしめた。

「行ってこい、ナツシユ。それと……。元気だな」

「ありがとう、ピクランタ」

体を放したその時、ピクランタの顔が、粘土のようにぐにやりと歪んだ。ナツシユは、急いで顔を背け、ヒルガオを追いかけた。

取り残されたピクランタは、呆然として、次々と〈育ての者〉から去っていく子どもたちを見つめた。

フロリラが、傍に寄ってきた。

「平気？」

「……ああ」

言いながら彼は、はじめに見たナツシユの瞳のことを思い出していた。漆黒の美しい瞳。その輝きを守るべく、十二年間走り続けてきたつもりだった。けれど、なにもかも突風のように過ぎ去ってしまった。

もっとやれることがあったかもしれない。凧のつくり方だけじゃなくて、もっと役に立つこと。字の書き方や、蝶々結びだって、本当はちゃんと自分から教えてあげたかった。……けれど。

もう、すべて遅い。セイダが言ったように、一瞬がすべてだったのだ。

「はらわたが抜かれたような顔になっているわよ」

そう言うフロリラも、手持ち無沙汰になっている両手を、頭の上にのせていた。

「あいつは、俺の十二年間すべてだったんだ。それが、こんな風にさっさといなくなっちゃうなんて、辛すぎる、よ……」

フロリラは目を伏せたが、ピクランタを見上げた。

「……でも、きつと癒えるわよ。彼らはエイネーで生きるんだし。……あなたは、だいぶナツシユ君に手をかけてきたみたいね」

「いや、俺、わからないよ。あいつのこと見てきたつもりだけど、わからない。

好きな本、好きな服、好きな歌、好きな色、君は、どれだけ育てた子のことを知っている？ 俺は、わからない。知らないところで、あいつはどんどん変わっていく。……俺は、幸せにできたのか？ あいつは、幸せだと感じただろうか」

「……。その答えは、私たちの範囲には、ないのかもしれないわ」

フロリラは、顔を前へ向けた。

「でも、あんなにはしゃいでいる。あの子たちが一度でも微笑んでくれたら、私たちは、自分の働きを誉めてもいいんじゃないかしら」

ピクランタは、光に消えていく子どもたちを見つめた。滲んでゆく様々な思い出が、ピクランタの胸を締め付けた。

やがて、小さな彼らの姿が見えなくなると、ピクランタは、ナツシュとの十二年間に目を閉じた。



黄金の光に包まれ、ナツシュは目を瞬かせた。

そこで見た、金色に輝く巨木に、彼はめをまるくした。木の枝からは、幾百もの石灯いしひがぶら下がっており、会場を朝焼けのごとく明るくしていた。巨木は、いまにもはちきれんばかりに豊満にそびえ、アベド二人分はある太い根を、まるで

会場を抱えるかのように、まあるく張っていた。

「あそこに女王様がいるっ」

小声で誰かが言った。見ると、巨木を背景にして、白銀に輝く一人のアベドがいた。背筋を伸ばし、一段高く作られた場所で、こちらを見下ろしている。その姿は、静かな一番星のようだった。

「女王様は、美人なんだぜ」ヒルガオが言った。

「どれくらい？」とナツシュ。

「ええと……、俺くらい」

ナツシュは吹きだし、ヒルガオも、口を開けて無言で笑った。

「ヒルガオ、見て！みみず 蚯蚓がいる！」

「なに！？ どこどこ」

友人たちに呼ばれ、ヒルガオは去っていった。大勢の子どもの波にのまれ、ナツシュは、ヒルガオを見失った。胸の穴に、風が吹きこむような痛みを感じた。

「さあ、並べ並べ、子どもたちよ。仕事人が見ているぞ。間抜けだと思われたくなかったら、きちっと前を向くんだ」

禿げの守りの人が、子どもたちを整列させながら言った。ナツシュは、周りを見渡した。

壁を築く抱えの木の根に、大勢の仕事人たちが集まって、会場をみおろしてい

た。いわゆるこれが、ヒルガオの言う、頭がどきどきというやつだった。これほど多くの仕事人を見たのは、はじめてだ。

前掛けをしたままのつくりの人、草色の服を着た自然の人、猫を連れた獣の人など、様々なアベドが一堂に会している。彼らは、戸惑う子どもたちを見たり、前方にいる楽団の演奏を聞いたりしていた。

楽団員たちは、緑色の袖なしの上着に、金色のルダラといういでたちで、竜を模った弦楽器や、羊の皮を張った太鼓をたたいていた。木の笛が、これから見習いになる子どもたちへ歓迎の声を響かせている。それが笑い声のように波をつくったとき、演奏は終わった。

拍手が鳴り響いた。それと同時に、女王様が一步進み出た。女王様の頭には、霜で造られたかのような、繊細な冠が乗っていた。赤に橙、水色に黄色、紫や桃色、緑と紺、そして白に銀色と、様々な色の宝石が埋まっている。その冠は、女王様が頭を動かすたびに、きらきらと光を放った。ヒルガオがあれを見たらなんだろう。「俺の方が綺麗」とでもいうだろうか。

すると、禿げの守りの人が前に出て、こう声高に言った。

「私、守りの人〈育ての者〉代表、ガバランは、エイネー歴1528年生まれのアベドたちが満十二の歳になったことを認め、エサルノア女王陛下へ、見習いの式の開催を願います」

拍手がやみ、水を打ったような静寂の中、エサルノア女王様はさっと腕を広げた。白金色の髪が広がって落ちる。

女王様は、並ぶ子どもたちをゆっくり見て取ると、低いが、美しい声で、こう言った。

「守りの人、ガブランよ。わたくし、現女王エサルノアは、そなたの要求を認め、今宵、1540年見習いの式の開催を、宣言いたします」

それから不思議なことが起こった。女王様がこちらを見下ろした時、耳の奥で声がした。

「名もなきアベドの子どもたち。今宵、見習いとなり、真の名を手にするあなたたちを、我々は仲間として歓迎いたします」

女王エサルノア様の声の間違いなかったが、女王様は口を動かしていなかった。誰だ？ 周りの子も、あたりを見渡した。

「子どもたち、わたくしの声が聞こえる者は、わたくしを見るように」

優しい口調。やはり、女王様が話しているようだ。みんなは、女王様を見上げた。

「エイネーの民として、影の人が導いてくださいますように」

ナツシュは、首の後ろがぞわつとした。なんてことだ！ エサルノア女王様は、魔法を使って、自分たちに直接語りかけていたのだ。ナツシュは、女王様に畏怖

を覚えた。ピクランタより若いが、彼より断然力があるのだと、この時強烈に思
い知らされた。

女王様は微笑み、今度は、口を開いて言った。

「さあ！ これより、見習いの証である、真の名、および見習い帽子を、あなた
たちに授けましょう。《シオ・レミ・ルオ》！」

ナツシュの腕は、震えはじめた。なにが起こるのか、さっぱり読めなかった。

一人の男の子が、ガバランの目配せを受け、壇上に上がった。

女王様が、そこでまたなにかを呟いた。そうして、傍らのアベドから、白く、

丸い見習い帽子を受け取ると、男の子の頭にかぶせた。

振り返った男の子は、いまにも心臓が飛び出て階段から転げ落ちてしまいそ
うなほど、動揺と感動を浮かべていた。

けれど彼は、転げ落ちることなく、ゆっくりと階段を降り、会場の出口から退
場した。子どもたちは、恐れ多くて女王様をもう一度見やった。

真の名前をもらうって、どういう感じなの！？

「あれは、アウシエスル実言葉アウシエスルって言うんだぜ」

ナツシュは、毛が抜けるかと思うほど驚いた。

隣にヒルガオがいた。

「驚かせないでよっ」

「ミミズがよ、なかなか捕まらなかったんだ。でも、ぽいってしてきた。』ここはお前の参加する場所じゃねえ!』ってな」

ヒルガオは、つまんでぽいするふりをした。「連れて来てほしかった?」

「いいや、ぜんぜん」

ナツシュは、だが、ヒルガオが戻ってきてくれて嬉しかった。

「で、アッシュェスミン実言葉って何?」

ナツシュが訊ねると、ヒルガオは、よくぞ聞いてくれたと、頷いた。

「フロリラの前の〈育ての者〉が言っていたんだけどな、アッシュェスミン実言葉は、古い言葉でな、今のエイネーの言葉の、もとになった言葉で、えー……魔法が使えるアベドが使う言葉で……えー、つまり、そう、女王様が使うと……、とにかく、ものすっげえことが起こるんだよ!」

「つまり、あの呪文でなにかが起こるってこと?」大雑把な彼の説明から、ナツシュは考えた。「……もしかして、あれで自分の名前がわかるのかな?」

「そうさ! コツは、頭をからっぽにすること。なんにも思わず、自分に正直になること。あとは向こうから、勝手にやって来る」

「それも、その……前の〈育ての者〉から聞いたこと?」

「……ああ。そう」ヒルガオは、目を反らした。

「もし失敗したらどうなる? 名なしになったりとかする?」

「そーんなひどいこと！　ちゃんと来るって。じゃなかったら……どうなるんだろうな？　影の地に送られたりするんじゃないかね？」

ナツシユは、ぞつとした。そんなこと、絶対にあってはならない。ナツシユは、ヒルガオの言ったコツを頭に叩き込んだ。

ついに、ヒルガオの番がやってきた。彼は、階段を一段ぬかして駆け上がった。

女王様があの言葉を呟く。ヒルガオの頭に、見習い帽子がかぶせられる。

とたん、彼は口を押えて、にやにや笑って駆け下りてきた。彼はそのまま、出口へと消えた。

ガバランが、ナツシユに目配せした。いよいよだ。階段が目の前に迫って来る。足の感覚がない。

そして、階段を上った記憶もなく、ナツシユはエサルノア女王様の前に立っていた。

彼は、はつとした。エサルノア女王様は、笑っていた。銀色に輝く瞳は、月のようだった。

女王様は、アウシエスル実言葉を呟いた。美しい発音で。

まるで歌のようだと、ナツシユは思った。

頭にゆつくりと白い帽子がかぶせられる。心臓が、肋骨の檻を、どん、どん、と蹴飛ばす。

(からっぽにすること、正直になること……)

ナツシュは、ヒルガオの言葉を思い出し、落ち着こうとした。



「俺はチャルーだあああ！」

金髪の少年は、そう言って駆け回った。

抱えの木の裏側で、名前をもらった見習いたちは、感激で涙を流し、飛び跳ねて喜びを分かち合った。

「ほら、番地を言いな！ ご新居に案内するよ。女王様がまじないをかけてくださっただろう。見習い帽子の裏側だよ。ほら、よく見て。はやくしないと出発するよ！」

そう言っているのは、集まっている御者だった。馬車がいざるところに停まっており、エイナー馬のいななきが、見習いたちの歓喜の声と混じっていた。空には小さく星が輝き、夜風がいつそう興奮をかき立てた。

御者たちに言われ、見習いたちは帽子をひっくりかえし、銀色の数字を見つけると、目的の馬車へ走っていった。チャルーも例にもれず、「俺は3015番地く！」と叫んで、馬車へ駆けだした。

「名前は？ あと番地も」

担当の御者は、面倒くさそうに尻を掻きながら言った。

「チャルー、3015！ チャルー、3015！」

「わーかったから、早く荷台に乗ってくれ」

御者は、紙束に記録しながら、後ろを指した。子どもたちは、次々とやってきた。
た。

「ねえ、おじさん、あたしの名前聞きたい？ ニルタっていの！」

「私、ヨーナよ！ この子とおんなじ家に住むの！」

「それはようござんした」

大興奮の彼らをまとめながら、御者は、そろそろ出発しようかと考えた。

「3000から3999番地！ もういねえか？ 遅れても知らねーぞう！

……最終便なんだ。もう一回来るなんてごめんだね。なあ？ 愛しの相棒」

馬に語りかけながら、御者は、一人の少年が駆けてくるのを視界の端にとらえた。
た。

「僕も！ 僕も乗せて！」

「あいよ、黒髪のぼうず。名前はなんだ？ 番地は？」

黒髪の少年は、一瞬たじろいだ。

「クワーレン。3015番地」

「はいはい。じゃ、後ろに乗りな。クワーレン」

御者は言うや、エイネー馬に出発の口笛を鳴らした。

黒髪の少年クワーレンは、急いで荷台へ走った。

「こっちだ！」

後方から、誰かの手が伸びていた。チャルーだ。クワーレンは手を取り、なんとか乗りこんだ。

「よお、お前もか！ たしか、ナ〜……何とかって仮名の……。何番地になったんだ？」

「君と一緒にだよ」

「まじか！ まじで！？ あそこで会ったのは、ありゃ影の人の仕業（予期していなかった巡り合わせという意味）だな！ 俺、チャルーって名前になったんだ！ お前は？」

「クワーレン」

「クワーレン！ やったな！」

チャルーは肩を殴って来た。クワーレンも、肩を殴り返した。

高揚と緊張で、頭がくらくらする。自分の名前を、心の中で反芻する。クワーレン、クワーレン。僕は、クワーレン。

エイネー馬は駆けだした。見習いたちは、歓声をあげた。

「いけー！ もっと飛ばせー！」 チャルーは、へりを叩いた。

抱えの木が後ろに遠ざかっていく。式の明かり、保育部屋、ピクランタ、どんどんどんどん離れていく。

クワーレンは、馬車に揺られながら、後ろになった思い出たちを考えた。かぼちゃや、ガルドや、蜘蛛、アバルバン谷のことを。

（僕は、クワーレン。呪いを知らない、新しい名前。さようなら、ナツシユ。さようなら、ピクランタ。蜘蛛。そして、眠りのアベドも）